

「呼びかけられて」 原 宝牧師（上大岡教会）  
マルコによる福音書 1章 14-20 節

本日の聖書は、イエスがガリラヤで宣教を開始され、最初の弟子たちを呼びかける場面です。ここで語られている中心的な出来事は、人間の側の決断や信仰心ではなく、神の国がすでに到来しているという現実です。

「時は満ち、神の国は近づいた」という宣言は、単なる時代認識や終末思想の提示ではありません。ここで言われている「時」（カイロス）とは、均等に流れる時間ではなく、神の出来事が集中して起こる決定的な時です。それは後戻りのできない、不可逆的な時であり、この時を前にして、人はもはや同じ場所に留まることができなくなるのです。

神の国とは、人間が努力して実現する理想社会や倫理的完成形ではありません。それは、神が王として支配を開始している現実を指す言葉です。つまり、神の国は「近づいた」のではなく、すでに始まっており、その現実が人間の生活のただ中に押し寄せているのです。その文脈で語られる「悔い改めよ」「福音を信じよ」という呼びかけは、道徳的命令や自己改革の要請ではありません。人間が自力で考えを改め、信仰を選び取ることが求められているではありません。むしろそれは、神の国の到来によって、人間の向きが強制的に変えられてしまう出来事です。悔い改めとは、主体的努力ではなく、神の支配のもとで方向転換させられることです。

信じるとは、理解し、納得し、決断することではありません。それは、すでに始まっている神の出来事に巻き込まれてしまうことです。だからこそ、イエスの呼びかけに応じた弟子たちの姿は、英雄的決断として描かれていません。彼らは信仰的に優れていたから従ったのではなく、呼びかけに捕えられ、もとの生活の文脈を断ち切られてしまったのです。

漁師であった彼らは、網や舟、父や仕事を「捨てた」と記されています。しかしそれは、彼らが何かを犠牲にしたという美談ではありません。神の国の現実が到来した以上、それまでの生の座標軸がもはや維持できなくなつたという事態の表現です。呼びかけは、人間の人生を安全な形では残しておかないのです。この呼びかけは、整えられた信仰を前提としていません。むしろ、生活の只中で揺れ動き、判断を保留したままの人間を、そのまま捕える力として現れるのです。だからこそ、ここで語られているのは、理想的な弟子像ではなく、呼びかけに抗いきれずに巻き込まれていく人間の姿です。神の国の出来事は、人間の理解や同意を待たずに先行し、その人の生を新しい文脈の中へと押し出していくのです。

礼拝とは、この呼びかけが今ここで起こる場です。わたしたちは信仰の準備が整つてから招かれるのではありません。迷いや恐れ、不安を抱えたまま、すでに始まっている神の国の現実の前に立たされています。説教とは、その現実を説明することではなく、すでに起こっている呼びかけの場に、共に立つことなのです。

神の国は、わたしたちの確信や熱心さによって支えられているのではありません。むしろ、確信が揺らぎ、不安を覚えるその場所でこそ、呼びかけは起こるのです。今週もまた、この呼びかけに捕えられた者として、それぞれの場所へと遣わされていきたいのです。「わたしについて来なさい」との呼びかけによって、信じ従う道への招きとは、主イエスの引き起こす奇跡であることを心に刻みたいです。この一事に賭けて歩んでいきましょう。